

【調査の目的】

本調査は、子どもたちの学びに関する意識や実態を明らかにするとともに、**どのような学びのあり方が成績をはじめとするアウトプットに効果をもっているのか**を検討することを目的にしている。経験則として、勉強のできる子ほど成績を上げるコツのようなものを習得している人は多い。しかし、科学的にみたときにそれは正しいのか。教育心理学では「自己調整学習」に関する一連の研究のなかでエビデンスが積み重ねられてきたが、実証的なデータは一般的な保護者や教員の目に触れることが少なかった。そこで今回、「自己調整学習」の理論を参考にした調査を行うことで、子どもたちの学びの実態をとらえ、よりよい学習のあり方について検討したいと考えた。

【成績と相関がある要因】

成績と相関がある要因として真っ先に思い浮かぶのは、「学習時間」である。一般に、時間を十分にとって学習している子どもの方が、学力が高い。そのことは、本調査からも明らかだ。P.10の図3-2に示しているように、**成績上位層ほど家での学習時間は長く、下位層ほど短い**。とはいえ、平均時間に換算して、両者の差は20~30分程度。思ったほどの差はない。また、学習時間の長短と成績の上下をクロスさせると、学習時間が短いのに成績がよい子どもが一定割合で存在するのも事実である。今までは学習の「量的側面」を重視して、授業時数や宿題・補習の増加など、量を増やすことで学力の維持・向上に一定の成功を収めてきた。しかし、時間は限られており、量を増やすにも限界がある。今後は、**学習のあり方そのものをどう変えていくかという「質的側面」の改善を重視することが求められる**だろう。たとえば、P.13の図4-3のように、学習時間が比較的短くても高い成績を維持している子どもは、「プランニング方略」や「モニタリング方略」のような客観的な自己理解（メタ認知）を用いた方法を多く取り入れ、問題を解く際にも意味や考え方をよく確かめている。こういう子どもたちは学習の質が相対的に高いといえる。

【「質」に注目した学習のあり方の改善と支援を】

ところで、学習の「質」といっても、人によってイメージが異なりそうだ。そこで、今回は「自己調整学習」の理論を参考にしつつ、**「主体的な学び」に必要な要素として「メタ認知（自己理解）」「学習意欲（学習動機づけ）」「学習方略」の3つを設定**し、それぞれについて調べることにした。さらには、**保護者にも調査を行うことで、保護者による働きかけの影響についての検討**も試みた。そのなかでは、成績上位層が高い内発的動機づけをもって学習していること、そのような子どもは問題を解く際に考え方などのプロセスを重視する傾向が強いことが明らかになった。さらには、保護者が内発的動機づけを高めるような支援をしているケースで子どもの成績は相対的に高く、保護者の働きかけの重要性が改めて示された。この「速報版」のなかでは、調査結果に加えて、「基礎知識」として学習の質を高めるのに重要なポイントとなる用語を解説している。そちらも併せて参照してほしい。

どのように学習の質を高めていくかは、子どもの発達や学力の状況によって異なる。メタ認知力が高まる一定の学年以上の成績上位層は、学習の質を高めるうえで自分にとって効果的な学習方法を選択、実行でき、それがさらに高い成果につながるといった好循環を生んでいる。学年が低い子どもや成績下位層に、その循環をいきなり作るのは難しいかもしれない。しかし、**主体的に学ぶためには、そのような自律的な学習のやり方を獲得していかなければならない**。そのために、保護者や教員は何をすればよいか、ともに考えていきたい。この「速報版」が、その一助になれば幸いに思う。